サンプル　架空の会社を題材にした、結果報告書の例

AIチーム導入アセスメント 結果報告書

読んだ資料	7種類
全件を点検した記述書	61本
試算の回数	20,000回
出口判定に間に合う確率	31% → 65%

SAP S/4HANA 導入プロジェクト　要件定義の工程

1 結論	2 読んだもの	3 現在地の地図	4 数字で見た現在地 解析 4つ	5 見つかったこと 所見 6件	6 効果の見立て	7 AIチームの体制案	8 要件定義の進め方	9 最初の30日と90日

この資料について

アセスメントを受けると、何が手元に届くのか。

この資料は、TechTime が行っている「AIチーム導入アセスメント」の結果報告書のサンプルです。報告書の構成と、分析の深さをそのまま見ていただけるよう、実際にお渡しする報告書と同じ形で作りました。

題材は架空の会社です。会社、人物、資料、課題、数字はすべてこの資料のために作りました。統計の解析は、置いた設定値から実際に計算しています。計算の方法は付録に書きました。

> **貴社の資料で、同じ分析を行います。**設計書の様式や会議の記録をお預かりし、どの工程に AIチームが効くか、何から始めるかを報告書にしてお返しします。詳しくは最後の頁をご覧ください。

題材（架空）	A社　産業機械メーカー。国内に3工場
プロジェクト	SAP S/4HANA の導入。販売・購買・生産・会計・原価の5領域
いまの工程	要件定義の4か月目。出口判定は12月18日
体制	約60名（お客様 約25名、導入の会社 約35名）
アセスメントの断面	10月30日。出口判定まで35営業日
報告書の読み手	プロジェクトの責任者と、各領域のリーダー

「AIチーム」は、進捗管理・設計・開発・テスト・点検をそれぞれ受け持つ AIを、手順と点検の観点を持たせてプロジェクトに組み込んだものを指します。

結論

出口判定に間に合う確率は 31%。3つの課題を先に片付けると 65% になる。

問い 1　どこに AIチームが効くか

会議の決定を資料に戻す作業と、設計書の全件の点検。

会議で決まったのに要件一覧が古いままの要件が 38件あります。機能記述書 61本を全件点検すると、指摘は 429件でした。人の抜き取りでは 13本しか見られていません。

問い 2　何から始めるか

移行データの2つの課題と、部品表の版の持ち方。

出口判定の遅れの 56% は、移行データの流れが決めています。効き目の大きい3つ（K-01・K-05・K-03）を先に決めると、間に合う確率が 31% から 65% に上がります。

問い 3　何が変わるか

決めることが、毎朝そろった状態で届く。

問いの 24% が1人に集まり、移行データの問いは直近の週で 3件しか答えが出ていません（14件中）。AIチームが記録を読んで下書きまで作り、人は決めるだけにします。

読んだ資料	全件を点検した記述書	見つかった指摘	期日に間に合う確率	AIの読み取りの一致	減る工数の見込み
7種類	61本	429件	31% → 65%	91.5%	952人日

貴社の資料で、同じ分析を行います。　アセスメントのご相談　techtime-jp.com/contact

読んだもの

抜き取りではなく、預かった資料をすべて読んだ。

全件を読むので、「たまたま見た資料がそうだった」という結論になりません。何をどこまで読んだかを最初に示します。

資料	量	何を読み取ったか
業務フロー	48本	図の中の手順と、手順どうしのつながり
機能記述書	61本	全件。8つの観点で点検
要件一覧	412件	全件。状態と、会議の決定との食い違い
会議の記録	86本（約130時間）	決まったこと、決まっていないこと、宿題
課題表	214件	期日、担当、止まっている日数
チャットの投稿	3,840件（312スレッド・8週間）	誰が誰に問い、答えが出たか
追加開発の見積もり	96本	工数と、前提にしている要件

■ 読み方

1. AIがすべての資料を読み、決定・未決・食い違い・指摘を拾う。
2. 同じ資料をもう一度読ませ、2回の結果を比べる。食い違った所は人が確かめる。
3. 拾った結果のうち 60件を人が抜き取って、元の資料と照らす。
4. 解析の結果を、プロジェクトのリーダーに見てもらい、事実と違う所を直す。

読んでいないもの：契約書、個人の評価に関わる資料、本番のデータ。チャットは、プロジェクトの公開のチャンネルだけを対象にしました。個人あてのメッセージは読んでいません。

現在地の地図

6つの工程 × 5つの AI。効く所と、効かない所。

AIチームが受け持てる作業を、工程ごとに並べました。運用保守の行がすべて「一部」なのは、導入の記録がどんな形で残るかで決まるからです。

	進捗管理のAI	設計のAI	開発のAI	テストのAI	点検のAI
要件定義 いまここ	◎ 課題とリスクを毎朝拾う	◎ 業務の流れとシーケンス図を起こす	—	—	◎ 要件一覧と会議の決定を照らす
設計	◎ 設計の残りと止まりを数える	◎ 様式に沿って初版を起こす	○ 設計の途中で動きを試す	—	◎ 全件を8つの観点で点検
開発	○ 進み具合を記録から集める	○ 変更を設計書に戻す	◎ ABAP と単体テストを起こす	○ 単体テストのデータを作る	◎ 規約と設計書との対応
テスト	◎ 不具合の傾向を毎日まとめる	—	○ 不具合の直し方の下書き	◎ 画面を操作して実施し証跡を残す	◎ 結果と期待値を全件で照らす
移行	○ 移行の課題を拾う	—	◎ 変換と照合の道具を作る	○ 移行後のデータで流す	◎ 全件を変換し全件を照合
運用保守	○ 問い合わせの傾向をまとめる	○ 改修の影響する範囲を出す	○ 改修の下書き	○ 改修後の確認を流す	○ 夜間の処理を見張る

◎ AIが受け持てる。A社の資料で確かめた　○ 一部を受け持てる。前の工程の成果物の形による　— AIの出番がない

現在地の地図

AIが受け持たないことを、先に決めておく。

AIに任せる範囲を広げるほど、人が決める所をはっきりさせておく必要があります。A社では次の線引きを提案します。

■ AIチームが受け持たないこと

業務のあり方を決める	受注から請求までをどう進めるかは、業務の方が決めます。AIは、決めるための材料を並べます。
作るか、作らないかを決める	追加開発にするか標準に合わせるかは、お客様と PM が決めます。
合否を決める	テストの合否と、工程の出口の判定は人が行います。
本番の環境を操作する	AIが画面を操作するのは、検証の環境だけです。
社外との合意	連携先の会社との取り決めは、人が行います。

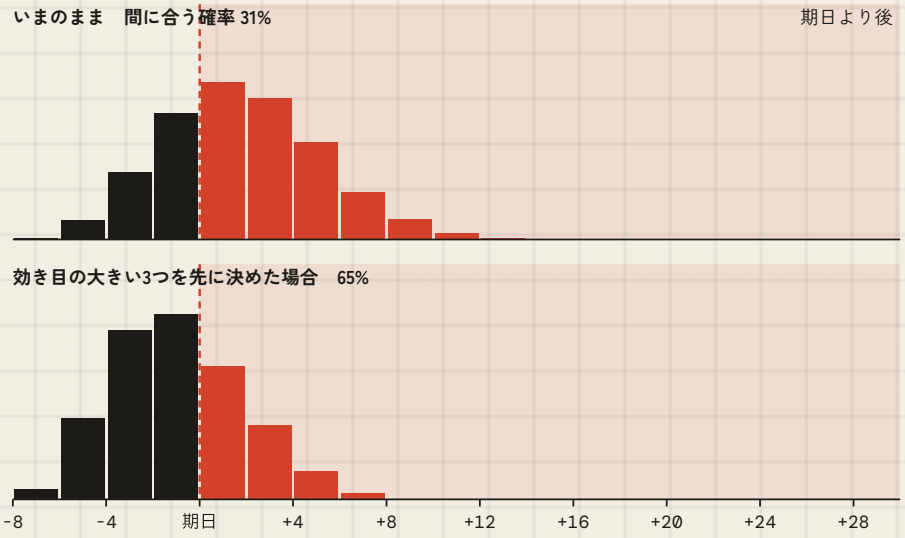
■ A社で、いまから着手できること

着手できること	材料	状態
会議の決定を要件一覧に戻す	会議の記録 86本	そろっている
機能記述書の全件の点検	記述書 61本、様式	そろっている
課題とリスクを毎朝拾う	チャット、課題表	そろっている
業務の流れに番号を付け、要件とつなぐ	業務フロー 48本	図の描き直しが要る
追加開発の候補の見直し	見積もり 96本	前提の要件が未決
設計書の初版づくり	設計書の様式	様式がこれから

解析 1　期日に間に合う確率

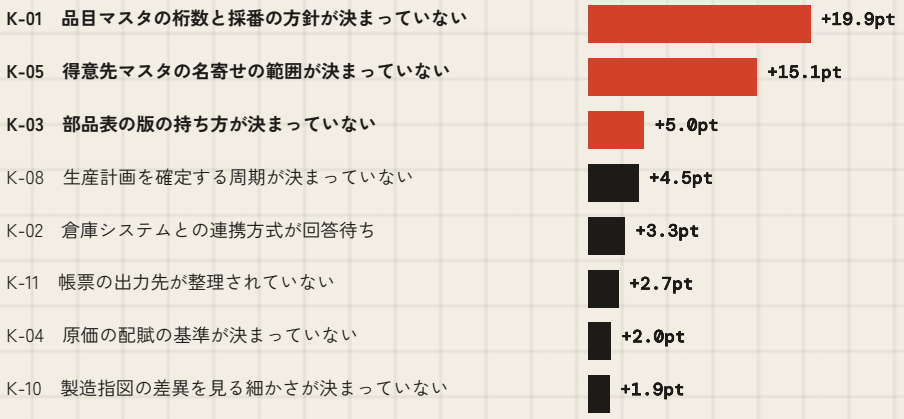
いまのままでは、出口判定に間に合う確率は 31%。

12件の未決の課題のうち、効き目が大きいのは上の3件です。残りの9件を先に片付けても、確率はほとんど上がりません。



未決の課題 12件それぞれに、遅れの見込みを「早い・普通・遅い」の3点で置き、20,000通りの進み方を試した結果です。棒の高さは、その日に終わる進み方の割合です。

■ どの課題を先に決めると、確率が上がるか

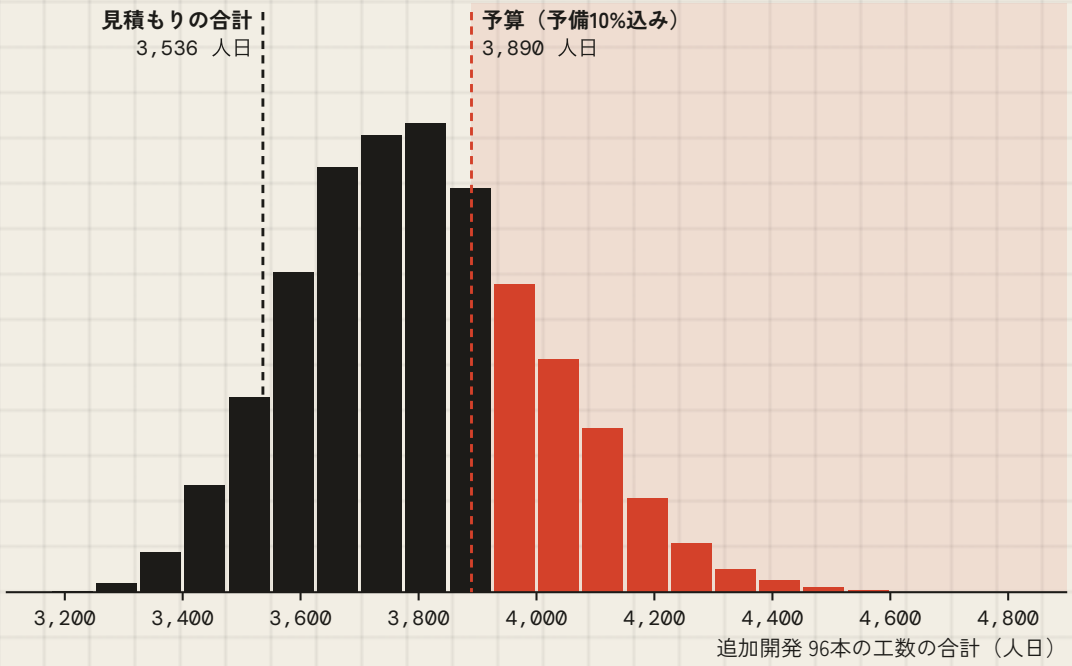


遅れを決めている流れ	56% 移行データ	20% 生産	13% 連携	9% 原価
半分の進み方で終わる日	期日の +1.6 営業日		3つを決めた場合 -1.1 営業日	

解析 2　追加開発の工数のばらつき

追加開発が予算を超える確率は 32%。ばらつきの 42% は 22本から。

見積もりの合計は予算に収まっています。超える恐れを作っているのは、前提の要件がまだ決まっていない機能です。先に要件を決めれば、ばらつきは縮みます。



半分の進み方での合計	3,792 人日	8割の進み方が収まる合計	3,978 人日	9割	4,083 人日

1本ごとの工数を「少ない・見積もりどおり・多い」の3点で置きました。前提の要件が未決の 22本は、多い側を見積もりの 2.3倍までとしています。

■ ばらつきへの効き目が大きい機能

番号	機能	規模	見積もり	8割が収まる値	効き目
A-083	出荷指示の送信	大	94	130	5.4%
A-089	部品表の版の切替	大	89	123	5.0%
A-079	検収の差異一覧	大	83	115	4.6%
A-085	差異分析の帳票	大	65	90	3.5%
A-081	与信の確認	大	97	115	2.9%
A-084	購買依頼の自動起票	大	85	101	2.6%
A-061	（名称は省略）	中	43	60	2.2%
A-056	（名称は省略）	中	43	60	2.2%

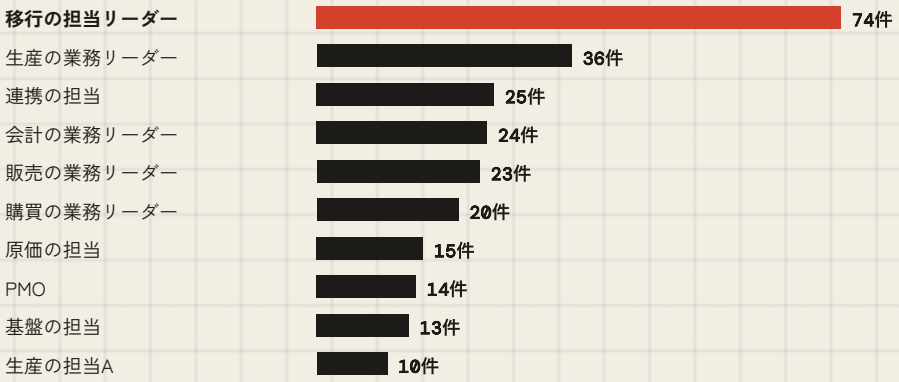
効き目＝合計のばらつきのうち、その機能が占める割合。単位は人日。

解析 3　問いの集まり方

問いの 24% が1人に集まり、移行データの答えが止まり始めている。

誰の働きぶりを見るための解析ではありません。問いが集まりすぎている所と、答えが止まっている話題を見つけて、手を打つために使います。

■ 問いを受けた回数（312スレッド・上位10人）



18人に均等に問いが来るとした場合、いちばん多い人でも全体の 9.3% を超えることは 20回に1回もありません。実際は 23.7% で、偶然では説明できない集まり方です。

■ 答えが出た問い ／ 出された問い（話題 × 週）

	1週	2週	3週	4週	5週	6週	7週	8週
販売	4/7	9/11	7/7	3/3	8/10	4/9	3/3	5/9
購買	4/6	3/4	2/3	2/3	4/5	6/7	3/5	4/4
生産	6/9	8/10	5/6	4/5	6/8	5/12	5/12	5/6
会計・原価	9/9	8/8	2/3	5/6	3/4	3/4	4/4	6/8
移行データ	11/11	6/7	3/6	5/9	7/12	5/11	4/7	3/14
連携	5/7	3/6	9/12	3/5	6/10	1/3	2/5	7/10

答えが出るまでの日数	半分の問いは **2.4** 営業日以内	遅い方の2割は 6.2 営業日以上

「答えが出た」は、5営業日以内に、問いに対する決定か回答がスレッドに書かれたものを数えました。色が濃いほど、答えが出ていません。

解析 4　点検の指摘の偏り

指摘 429件は均等ではない。生産と原価に、偶然では説明できない偏りがある。

機能記述書 61本を、8つの観点で全件点検しました。指摘の多い所は、未決の課題とつながっています。

領域	項目の定義の抜け	例外の記載なし	他の資料との食い違い	用語のゆれ	前提の記載なし	連携先の記載なし	計	1本あたり
販売 14本	18	27	22	17	9	10	**103**	7.4
購買 12本	18	28 偏り	7	8	8	8	**77**	6.4
生産 15本	40 偏り	21	22	13	11	15	**122**	8.1
会計 11本	12	10	7	9	10	6	**54**	4.9
原価 9本	11	17	10	8	23 偏り	4	**73**	8.1
計	99	103	68	55	61	43	**429**	7.0

■ 生産 × 項目の定義の抜け

40 件

部品表と作業手順の項目に、桁数と必須かどうかの記載がありません。移行データの課題 K-01 と同じ根です。

■ 原価 × 前提の記載なし

23 件

配賦の基準が決まっていないまま（K-04）、記述書が先に書かれています。基準が決まると書き直しになります。

■ 購買 × 例外の記載なし

28 件

承認経路の例外（K-07）が洗い出されていないため、例外の処理が書かれていません。

領域と指摘の種類が無関係だとした場合に、これだけの偏りが出る確率は 0.04% です（20,000回の試算）。「偏り」の印は、その組み合わせだけで見ても多いと言える所に付けました。

読み取りの確かさ

AIに2回読ませて、91.5% が同じ結果。食い違った 35件は人が確かめた。

「AIの読み間違いではないか」という問いに、先に答えます。読み取りの確かさを測り、あやしい所は人が確かめる手順にしています。

■ 要件 412件の振り分け（1回目 × 2回目）

1回目＼2回目	標準で足りる	設定で対応	追加開発	運用で対応
標準で足りる	123	1	3	3
設定で対応	3	96	5	6
追加開発	3	1	103	0
運用で対応	5	3	2	55

対角線の上が、2回とも同じ振り分けになった件数です。

■ 2回の一致

91.5%

偶然の一致を除いた指標では 0.88（1 が完全な一致）。

■ 人の抜き取りとの一致

56 / 60件

食い違った 4件は、資料の書き方があいまいな要件でした。

■ 食い違いの扱い

2回の結果が違った要件は、AIの結論を使いません。元の資料の該当する所を並べて人に見せ、人が振り分けを決めます。この報告書の所見は、人が確かめたあとの結果だけで書いています。

貴社の資料で、同じ分析を行います。　アセスメントのご相談　techtime-jp.com/contact

所見 1 / 6

会議で決まった要件が、38件、要件一覧に戻っていない。

決定は会議の記録にあります。要件一覧が古いままなので、後の工程が古い前提で進みます。

■ 起きていること

会議の記録 86本から、AIが決定を拾い、要件一覧の状態と照らしました。決定が出ているのに「検討中」のままの要件が 38件あります。決定から一覧に反映されるまでの日数は、中央の値で 9営業日でした。

決定が戻っていない要件
38件

反映までの日数（中央の値）
9営業日

■ 根拠（資料の抜粋）

会議の記録　9月24日　販売の要件の検討会

「受注時の与信の確認は、**標準の機能で行う。追加開発は行わない**。限度額の見直しは月次の運用で対応する。」

要件一覧　R-118　与信の確認　10月30日時点

状態：**検討中**　対応の方針：**追加開発の候補**
見積もり：A-081 に計上

■ 放っておくと

追加開発の見積もり A-081 は、作らないと決まった機能の工数を含んだままです。同じ形の要件が、見積もりの対象に 11件あります。

■ 打ち手

進捗管理の AI が、会議の当日に決定を拾い、要件一覧の該当する行に直しの案を書きます。各領域のリーダーが案を見て、反映するかを決めます。

● 人が決めること

直しの案を反映するか。会議で決めたことと違う案が出たときは、どちらが正しいか。

所見 2 / 6

業務フローと機能記述書が、68か所で食い違っている。

同じ業務を書いた2つの資料で、手順や担当が違います。どちらが正しいかは、資料からは分かりません。

■ 起きていること

業務フロー 48本の手順と、機能記述書 61本の記載を照らしました。食い違いは 68か所で、販売と生産に多く出ています。フローにある手順が記述書に無いもの、担当の部門が違うもの、順番が違うものの3種類です。

食い違い
68か所

うち販売・生産
44か所

■ 根拠（資料の抜粋）

業務フロー　BF-023　出荷の流れ　手順 7

「倉庫の担当が**出荷の前に検品の結果を登録する**。登録が済むと出荷指示が確定する。」

機能記述書　FS-041　出荷指示の確定　3章

「営業の担当が出荷指示を確定する。**検品の結果の登録についての記載なし**。」

■ 放っておくと

設計の工程で、どちらかを前提にした設計書が書かれます。食い違いは結合テストまで見つからず、見つかった時点で設計からやり直しになります。

■ 打ち手

点検の AI が、フローと記述書を全件で照らし、食い違いを一覧にします。一覧には両方の原文を並べ、業務の方が見比べるだけで決められる形にします。

● 人が決めること

どちらの記載が正しいか。業務の進め方そのものが決まっていない場合は、検討会にかけるか。

所見 3 / 6

追加開発の候補 96本のうち、19本は標準の機能で足りる可能性がある。

作ると決める前に、標準で足りるかをもう一度確かめる価値があります。

■ 起きていること

追加開発の見積もり 96本について、前提にしている要件と、会議の記録、標準の機能の説明を照らしました。標準の機能か設定で足りる可能性があるものが 19本ありました。見積もりの合計では 612人日にあたります。

見直しの候補
19本

見積もりの合計
612人日

■ 根拠（資料の抜粋）

要件一覧　R-204　納期回答　追加開発の理由

「得意先ごとに**納期の回答の基準日を変えたい**ため、回答日の計算を追加開発する。」

会議の記録　10月8日　販売の要件の検討会

「基準日を変えているのは3社だけ。**3社は得意先マスタの設定で分ければ足りるのでは**、という意見が出た。結論は次回。」その後、この議題は取り上げられていない。

■ 放っておくと

標準で足りる機能を作ると、稼働のあとも保守とバージョンアップの手間が残ります。解析 2 で見た工数のばらつきも、その分だけ大きくなります。

■ 打ち手

設計の AI が、19本それぞれについて、標準の機能での実現の案と、その場合に業務を変える所を並べます。検討会の議題に戻し、作るかを決め直します。

● 人が決めること

標準に合わせて業務を変えるか、追加開発にするか。19本という数字は候補であり、決めるのはお客様です。

所見 4 / 6

移行データの問いが1人に集まり、直近の週は 14件のうち 3件しか答えが出ていない。

遅れが数字に出る前に、会話の記録に兆しが出ています。

■ 起きていること

解析 3 のとおり、問いの 24% が移行の担当リーダーに集まっています。移行データの問いは、1週目は 11件すべてに答えが出ていましたが、週を追うごとに下がっています。答えを待っている問いの多くは、品目マスタと得意先マスタの方針（K-01・K-05）を前提にしています。

1人に集まる問い
24%

直近の週の回答
3 / 14件

■ 根拠（資料の抜粋）

チャット　10月21日　移行のチャンネル

「品目コードの桁数が決まらないと、変換の仕様が書けません。**先週も伺いましたが、方針はいつ頃出ますか**。」返信なし（9営業日）

課題表　K-01　10月30日時点

担当：移行の担当リーダー　期日：10月16日　状態：**対応中**　最後の更新：10月9日

■ 放っておくと

出口判定の遅れの 56% は、移行データの流れが決めています（解析 1）。答えが止まったまま進むと、ほかの領域が終わっても出口判定ができません。

■ 打ち手

進捗管理の AI が、答えを待っている問いを毎朝まとめ、決めるために足りない材料を並べます。方針を決める場を1回設け、K-01 と K-05 を同じ日に決めます。

● 人が決めること

品目の桁数と採番の方針。名寄せの範囲。決める人を、移行の担当リーダー1人から、業務の責任者を含む場に移すか。

所見 5 / 6

生産の機能記述書に、項目の定義の抜けが 40件ある。

指摘の多さは、書いた人の問題ではありません。前提が決まっていないことの表れです。

■ 起きていること

解析 4 のとおり、生産の記述書 15本に「項目の定義の抜け」が 40件あり、ほかの領域より多く出ています。部品表と作業手順の項目で、桁数、必須かどうか、初期値が書かれていません。

生産 × 項目の定義の抜け
40件

記述書1本あたりの指摘
8.1件

■ 根拠（資料の抜粋）

機能記述書　FS-027　部品表の登録　4章　項目の一覧

「版：**桁数 未定**　必須：**未定**　備考：版の持ち方が決まり次第、記載する。」

課題表　K-03　部品表の版の持ち方

起票：8月27日　状態：**検討中**　関連する記述書：FS-027 ほか 6本

■ 放っておくと

項目の定義が抜けたまま設計に入ると、設計書と移行の変換の仕様が、それぞれ別の前提で書かれます。

■ 打ち手

点検の AI が、抜けている項目を記述書ごとに一覧にし、同じ課題を前提にしているものをまとめます。K-03 が決まった日に、関連する 7本の直しの案を AI が作ります。

● 人が決めること

部品表の版の持ち方（K-03）。決まるまでの間、関連する記述書を先に進めるか、止めるか。

所見 6 / 6

業務フロー 48本に手順の番号が無く、要件・設計・テストとつながらない。

いまの形のままでは、稼働のあとに「ここを変えるとどこに響くか」を引けません。

■ 起きていること

業務フローは図として描かれており、手順に番号がありません。要件一覧の 412件のうち、フローのどの手順のための要件かが書かれているものは 61件でした。残りは、人が読んで推し量るしかありません。

手順とつながっている要件
61 / 412件

番号のない業務フロー
48本

■ 根拠（資料の抜粋）

業務フロー　BF-023　出荷の流れ

図の中の箱に**番号が無い**。図は画像として貼られており、文字として読み取れない箱が 14個ある。

要件一覧　R-231　出荷指示の取消

関連する業務フロー：**「出荷の流れ」**（手順の指定なし）

■ 放っておくと

設計、開発、テストと進むほど、つながりを後から付ける手間が増えます。運用保守に入ると、改修の影響を調べるたびに人が資料を読み直すことになります。

■ 打ち手

設計の AI が、業務フローを元データに起こし直し、手順に番号を付けます。同じ元データからシーケンス図も描き、要件・設計書・テストを番号でつなぎます。

● 人が決めること

起こし直した業務の流れが、実際の業務と合っているか。番号の付け方の決まり。

貴社の資料で、同じ分析を行います。　アセスメントのご相談　techtime-jp.com/contact

効果の見立て

何を数えるかを先に決め、いまの値を置く。

効果を1つの数字で言い切ることはしません。見込みは幅と前提を付けて示し、入れる前と後を同じ物差しで比べます。

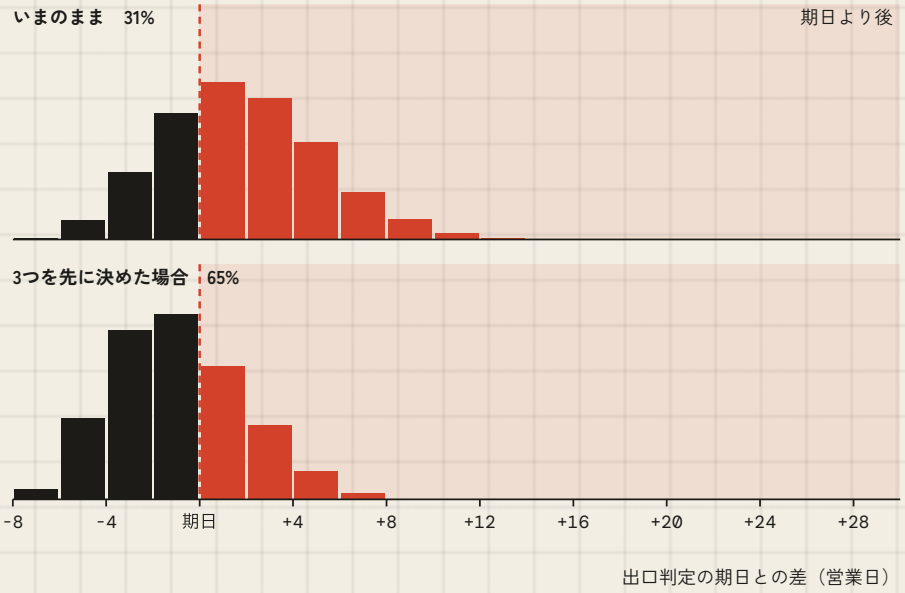
数えるもの	いまの値	打ち手のあとに目指す姿	測り方
出口判定に間に合う確率	31%	効き目の大きい3つを先に決めた場合 65%	課題表から毎週、同じ方法で試算する
決定が要件一覧に戻るまでの日数	中央の値　9営業日	会議の翌営業日に直しの案が出る	会議の日と、一覧の更新の日の差
点検した機能記述書	13　/　61本	61 / 61本。版が上がるたびに全件	点検の記録
答えが出るまでの日数（遅い方の2割）	6.2営業日以上	止まった問いが、毎朝の一覧に載る	チャットのスレッドの日付
追加開発の工数（96本の合計・中央の値）	3,792人日	AIチームを組み込んだ場合 2,841人日	機能ごとの実績の工数
手順とつながっている要件	61　/　412件	すべての要件が手順の番号を持つ	要件一覧の欄
追加開発が予算を超える確率	32%	AIチームを組み込んだ場合 1%未満	見積もりから毎月、同じ方法で試算する

右から2番目の列は、打ち手を行った場合の見立てです。約束する値ではありません。AIチームを入れたあと、同じ測り方で毎週の値を記録し、見立てと比べます。「AIを使わなかった場合」の値は測れないので、比べる相手は、入れる前の A社自身の値です。

効果の見立て

3つを先に決めると、間に合う確率が倍になる。

12件を上から順に片付けるのではなく、確率を最も上げる順に手を打ちます。順番は、課題表が更新されるたびに計算し直します。



■ 先に決める3つ

課題	流れ	効き目
K-01　品目マスタの桁数と採番の方針が決まっていない	移行データ	+19.9pt
K-05　得意先マスタの名寄せの範囲が決まっていない	移行データ	+15.1pt
K-03　部品表の版の持ち方が決まっていない	生産	+5.0pt

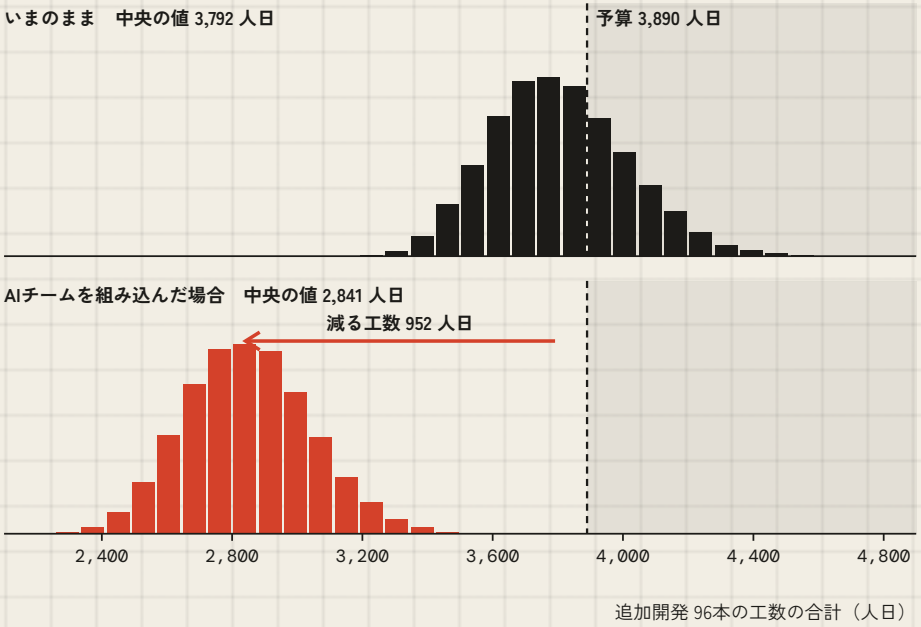
半分の進み方で終わる日	8割の進み方が収まる日
+1.6 → -1.1 営業日	+4.6 → +1.5 営業日

効き目は、その課題だけを最も早い見込みで片付けた場合の上がり幅です。3つを同時に片付けた場合の上がり幅は、足し算より大きくなります。数字は、いずれも期日との差です。

効果の見立て　工数

AIチームを組み込むと、追加開発の工数は約 950人日減る見込み。

解析 2 と同じ追加開発 96本について、設計からテストまでに AIチームを組み込んだ場合を計算しました。



同じ 20,000通りの進み方について、「いまのまま」と「AIチームを組み込んだ場合」の両方を計算し、差を減る工数としました。灰色の範囲は予算を超える側です。

減る工数（中央の値）

952人日　いまの工数の約 25%

見込みの幅（10回に8回はこの範囲に入る）

754 ～ 1,158人日

予算に収まる確率

68% → 99%以上

8割の進み方が収まる合計

3,978 → 3,009人日

この値で、体制や予算を先に減らさないでください。工程ごとの減り方は、資料に無いので仮の値を置いています。最初の10本の実績が出たら、同じ方法で計算し直します。減った工数を予備に回すか、前倒しに使うかは、お客様が決めます。

効果の見立て　工数

減る工数をいちばん左右するのは、開発と設計の時間。

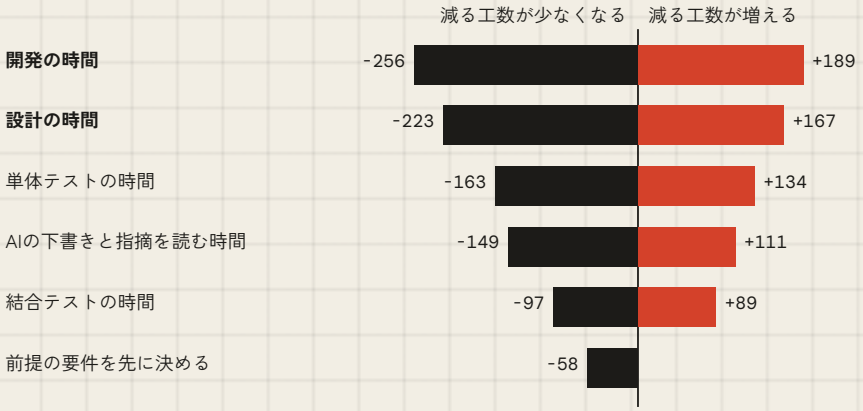
AIが作る時間は短く、工数を決めているのは人の時間です。どの工程の人の時間が減るかで、見込みが変わります。

■ 工程ごとの見込み

工程	AIチームが受け持つこと	1本の時間（人日） いま → 組み込んだ場合	96本で減る工数
設計	AIが初版を起こし、人は指摘を読んで直す	10.8 → 7.6	−350
開発	設計書から ABAP を起こし、規約との対応を AI が確かめる	10.8 → 6.7	−438
単体テスト	テストの仕様とデータを AI が起こす	7.2 → 4.9	−249
結合テスト	AI が画面を操作して実施し、証跡を残す	7.2 → 5.9	−148
読む時間	AIの下書きと指摘を、人が読んで確かめる	+2.2	+228
前提の要件	要件を先に決め、作り直しを減らす	−	−76
差し引き（中央の値）			−952

1本の時間は、見積もり 36人日の中くらいの機能を例にしました。工程の割合は、設計 30%・開発 30%・単体テスト 20%・結合テスト 20% と置いています。行ごとの中央の値を足しても、差し引きの中央の値とは少しずれます。

■ 1つの前提だけを動かすと、減る工数がどれだけ変わるか（人日）



置いた仮の値（AIを使ったときに残る人の時間の割合）	少ない	最もありそう	多い
設計	55%	70%	90%
開発	45%	62%	85%
単体テスト	50%	68%	90%
結合テスト	70%	82%	95%
読む時間（元の工数に対して）	3%	6%	10%

貴社の資料で、同じ分析を行います。　アセスメントのご相談　techtime-jp.com/contact

AIチームの体制案

要件定義の間は、3つの AI から始める。

5つの AI を一度に入れません。いまの工程で効くものから始め、工程が進むのに合わせて加えます。

お客様と PM

業務を決める。作るかを決める。合否を決める。

AI

進捗管理

課題とリスクを毎朝拾い、効き目の順に並べる

所見 1・4

AI

設計

業務の流れとシーケンス図を起こし、要件とつなぐ

所見 3・6

AI

開発

要件定義の間は出番なし。設計から加わる

–

AI

テスト

要件定義の間は出番なし。テストから加わる

–

AI

点検

要件一覧・記述書・フローを全件で照らす

所見 2・5

TechTime

A社の様式と規約に合わせて手順と点検の観点を作り、AIチームを組み、育てる。

■ 人を増やす提案ではない

いまの体制 約60名はそのままです。AIチームは、読む・照らす・下書きを作る作業を受け持ちます。

■ 手順は A社のものとして残る

AIへの指示と点検の観点は、A社の様式と規約に合わせて作り、A社の資産として納めます。

■ 設計に入る前に広げる

出口判定のあと、開発とテストの AI を加えます。要件定義で付けた番号が、そのまま設計・テストで使われます。

要件定義の進め方

出口判定までの35営業日を、6つのステップで進める。

A社はいま要件定義の中にいます。先の工程の話より、明日から要件定義をどう進めるかを厚く書きます。

	ステップ	AI AIチームが受け持つ	人が作る・確かめる	決 お客様が決める
1	**記録を読む**	会議の記録・チャット・課題表を毎朝読む	読む範囲を決める	—
2	**決定と未決を拾う**	決定を要件一覧に照らし、直しの案を書く	案を確かめる	**直しを反映するか**
3	**業務の流れを起こす**	フローを元データに起こし、手順に番号を付ける。シーケンス図も描く	実際の業務と合っているかを見る	**業務の流れ**
4	**要件とつなぐ**	要件・記述書を、手順の番号につなぐ	つながりの抜けを確かめる	**番号の決まり**
5	**全件を点検する**	記述書を8つの観点で点検し、指摘を一覧にする	指摘を読み、直す	**指摘を反映するか**
6	**出口を判定する**	未決・指摘・つながりの残りを数え、間に合う確率を出す	残りの扱いの案を作る	**出口の合否**

■ 毎週の動き

毎朝	会議の当日	週に1回	版が上がるたび
AIが記録を読み、課題とリスク、止まった問いを一覧にする	AIが決定を拾い、要件一覧の直しの案を出す	間に合う確率を出し直し、先に決める課題を選び直す	記述書を全件で点検し直す

要件定義の進め方　ステップ 1〜3

記録を読み、決定を戻し、業務の流れを起こす。

1 記録を読む

会議の記録・チャット・課題表 → AI **毎朝すべて読み、課題・リスク・止まった問いを拾う** → 課題・リスクの一覧 → **読む範囲と、一覧の見方を決める**

A社のいま　会議の記録 86本、チャット 3,840件。人が全部を読むことはできていない。

2 決定と未決を拾う

会議の記録 → AI **決定を拾い、要件一覧の行に直しの案を書く** → 要件一覧の直しの案 → **案を見て、反映するかを決める**

A社のいま　決定が戻っていない要件 38件。反映まで中央の値で 9営業日。

3 業務の流れを起こす

業務フロー 48本 → AI **元データに起こし、手順に番号を付け、シーケンス図も描く** → 業務の流れとシーケンス図 → **実際の業務と合っているかを確かめる**

A社のいま　手順に番号が無い。画像として貼られ、読み取れない箱がある。

要件定義の進め方　ステップ 4〜6

番号でつなぎ、全件を点検し、出口を判定する。

4 要件とつなぐ

要件一覧・機能記述書 → **AI 要件と記述書を、手順の番号につなぐ** → 手順→要件→記述書のつながり → **つながりの抜けを確かめる**

A社のいま　手順とつながっている要件は 61件（412件中）。

5 全件を点検する

機能記述書 61本 → **AI 8つの観点で全件を点検し、原文を並べて指摘を一覧にする** → 指摘の一覧 → **指摘を読み、反映するかを決める**

A社のいま　人の点検は 13本。全件の点検で指摘は 429件。

6 出口を判定する

未決・指摘・つながりの残り → **AI 残りを数え、間に合う確率と、先に決める課題を出す** → 出口判定の材料 → **出口の合否を決める**

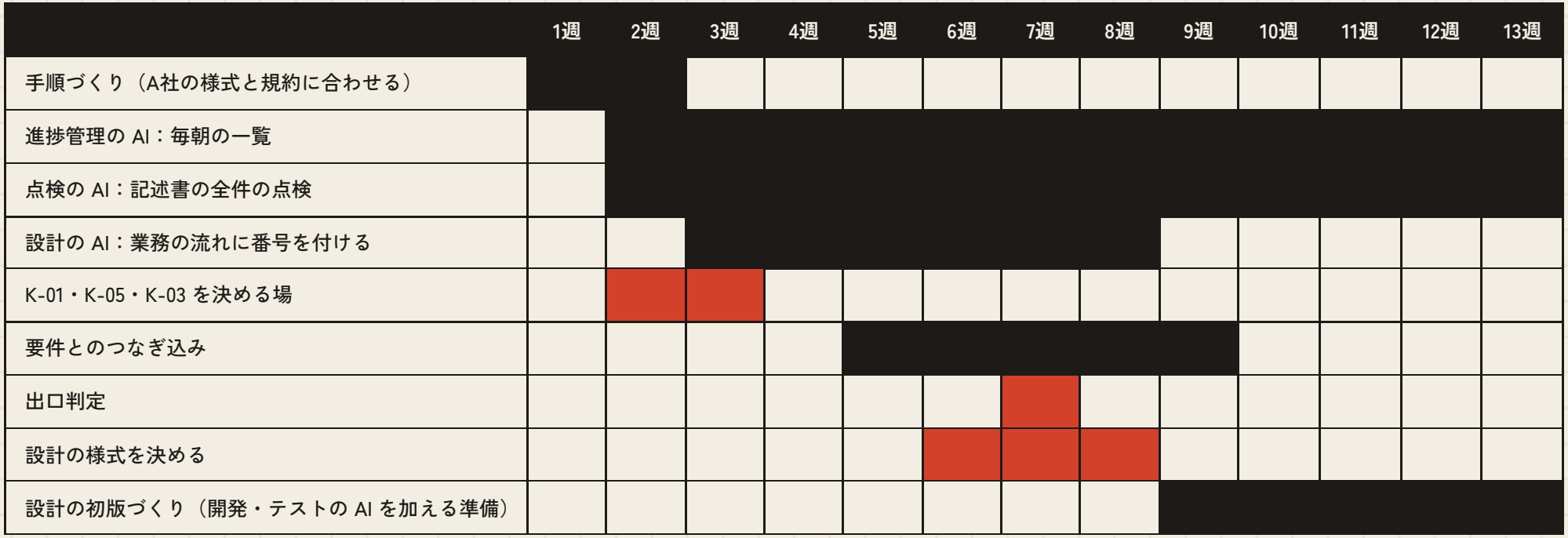
A社のいま　間に合う確率 31%。未決の要件 137件。

貴社の資料で、同じ分析を行います。　アセスメントのご相談　techtime-jp.com/contact

最初の30日と90日

2週目に3つの課題を決め、7週目に出口を判定する。

日程は、A社の出口判定（12月18日）に合わせた案です。出口判定の日は動かさず、その前に決めることを前に寄せます。



AIチームと TechTime が進める　　お客様に決めていただく場　　1〜4週が最初の30日、13週までが90日

■ 30日後に手元にあるもの

毎朝の課題・リスクの一覧。記述書 61 本の指摘の一覧。決まった K-01・K-05・K-03。

■ 出口判定の日に手元にあるもの

番号の付いた業務の流れ。手順につながった要件一覧。残りの未決と、その扱いの案。

■ 90日後に手元にあるもの

A社の様式に合わせた設計の手順。設計書の初版。入れる前と後を比べた数字の記録。

最初の30日と90日

お客様に決めていただくことは、5つ。

AIチームを入れても、決める人がいなければ進みません。決めていただくことを、期限と一緒に先に並べます。

	決めていただくこと	いつまでに
1	**AIに読ませる資料の範囲** 会議の記録とチャットのうち、対象にするもの	1週目
2	**移行データの方針を決める場と、決める人** K-01・K-05 を同じ日に決める	2週目
3	**要件一覧の直しを反映する人** 領域ごとに1人	2週目
4	**追加開発の候補 19本を検討会に戻すか**	4週目
5	**業務の流れの番号の決まり**	4週目

■ 役割

	受け持つこと
お客様	業務を決める。作るかを決める。合否を決める。読ませる資料を出す。
導入の会社	設計・開発・テストを進める。AIチームの下書きと指摘を使い、確かめる。
TechTime	手順と点検の観点を作る。AIチームを組み、毎週の数字を出し、手順を直す。
AIチーム	読む。照らす。下書きを作る。数える。

情報の扱い：お預かりした資料は、AIの学習に使われない設定で扱います。本番の環境を AI に操作させません。AIの結果は、人が確かめてから使います。

アセスメントのご案内

貴社の資料で、同じ分析を行います。

ここまでの頁は、架空の A社の例です。貴社のプロジェクトでは、何が見つかるでしょうか。

1

ご相談と、お見積もり

いまの工程と、お預かりできる資料を伺います。行える解析の範囲をお伝えし、お見積もりします。

2

資料を預かり、解析する

秘密保持の取り決めを結んだうえで資料をお預かりします。AIが全件を読み、人が確かめ、行える解析を行います。

3

報告書をお返しする

どの工程に AIチームが効くか、何から始めるかをお伝えします。効かない所も、分けてお伝えします。

■ お預かりする資料の例

資料	行える解析
設計書・機能記述書と、その様式	全件の点検、指摘の偏り
業務フロー、要件一覧	食い違い、手順とのつながり
会議の記録、チャット	決定の戻り、問いの集まり方
課題表	期日に間に合う確率
追加開発の見積もり	工数のばらつき

解析の範囲は、お預かりできる資料によって変わります。この報告書のサンプルは、上の資料がすべてそろった場合の例です。

ご相談はこちら

techtime-jp.com/contact

導入の検討中でも、途中でも、稼働したあとでも構いません。相談票の「いまの状況」と「相談したい工程」を選んでお送りください。

電話	03-4222-3363（月〜金　9〜19時）
メール	kdm@techtime-link.com
会社	TechTime株式会社　東京都渋谷区渋谷2-19-15 宮益坂ビルディング609

付録　解析の方法

この報告書の数字の出し方。

解析	方法
期日に間に合う確率	未決の課題ごとに、遅れを「早い・普通・遅い」の3点で置き、PERT 分布で値を引く。課題どうしはゆるく連動させる（相関 0.3）。7つの流れのうち最も遅いものを完了の日とし、20,000回くり返す。
課題の効き目	その課題だけを最も早い見込みに置き換えて同じ試算を行い、間に合う確率の上がり幅を取る。
工数のばらつき	1本ごとに「少ない・見積もりどおり・多い」の3点を置き、合計の分布を出す（相関 0.2）。効き目は、合計のばらつきのうちその機能が占める割合。
問いの集まり方	スレッドごとに、問われた人と、5営業日以内に答えが出たかを AI が読み取る。集まり方は、均等に問いが来る場合の 20,000回の試算と比べる。
指摘の偏り	領域 × 指摘の種類の表について、両者が無関係な場合に期待される件数との差を見る（カイ二乗の値 47.9）。偶然に出る確率は、20,000回の試算で求める。
読み取りの確かさ	同じ資料を2回読ませ、一致の割合と、偶然の一致を除いた指標（カッパ係数）を出す。別に 60件を人が抜き取って確かめる。

■ このサンプルの数字について

A社は架空の会社です。課題、見積もり、会話の記録、指摘の件数は、この資料のために置いた設定値です。確率、分布、効き目、検定の値は、その設定値から実際に計算しました。実在の会社の実績ではありません。

■ 解析で扱わないこと

個人の評価につながる集計は行いません。問いの集まり方は、役割の名前で示し、手を打つ所を見つけるためだけに使います。

© TechTime Co., Ltd.　この資料の文章と図は、TechTime が作成したものです。